

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(每月一回一日發行)
昭和二十二年二月廿日印刷納本昭和二十二年三月一日發行

淨土

三 月 號



第十三卷

第三號

法然上人鑽仰會發行



佛 教 の 責 務

高 橋 道 之

過日來朝したジュネーブ駐在のストロング博士（Y M C Aの總主事）が、次のような興味ある話しをした。

×
 印度の俘虜收容所には、一時、一萬名以上のイタリーの俘虜がゐたが、彼等は祖國の敗戦に意氣銷沈し、人生の意義を見失つて暗い生活をおくつてゐた。立上る元氣もなかつた。偶々、俘虜の状況を視察に來たY M C Aの一主事があつた。彼は宗教家としてこれを非常に残念がった。春秋に富む青年の、希望のない生活が、いたく彼の心をいためた。もう一度立ちあがらせたい。人間性をとりもどさせたい。彼はいろんな方法を考えた。繪や音楽を興へて、情操方面から更生させようかとも思つた。しかし、彼等に心を樂しませる仕事を興へて生甲斐を感じさせるのが急務だと思ひ、或日彼等に話しかけた。
 // 考えれば考えるだけ陰鬱になるばかりだ。心をまぎらすため、幕舎の前の空地にデザインをほどこせ。君た

ちの生活に必ず潤ひをもたらすから……”
 彼等は反抗するように答えた。

// デザインしろと言つたつて、資材がないじゃないか”
 // 土がある。工夫してごらん、きつと美しいものができ
 るよ”

それから二三ヶ月たつた。彼は各地の俘虜收容所をまはつて、再びもどつてきた。收容所にはいるやいなや、びつくりした。どの幕舎の前もきれいなデザインがほどこされ、彼等はいきいきとして働らいてゐるのである。期待以上の更生だつた。

// おかげさまで人間性をとりもどしました。資材がないのでなんにも出來ないと思つてゐましたが、言はれたように土で仕事をはじめましたら、非常に面白くなり、ここをどうしよう、あそこをかう改造しよう、工夫に専念し、何もかも忘れてすつかり心をうちこみました。そのうち暗い生活に光りがさしはじめ、自己をとりもどす

ことができなりました。しかも土には九つの色のあることまで発見しました。

彼等の一人は嬉しそうに語つた。

×

戦後、荒れはてた焼土の中で、すべてのものを失ひ、不自由な生活をいとなんでゐる私たちは、ともすれば、人生の意義を見失ひがちである。建設のために立ちあがらうとする意欲も、くじけがちである。しかし、すべてのものは失はれ奪はれても、人格の尊厳性のみは残つてゐる。なにもない中から土によつて自己をとりもどしたイタリーの俘虜のように、確信と人間性を呼びおこすところを、私たち當面のつとめである。

私は更生のいとぐちをイタリーの俘虜に與へた Y M C A の主事に感謝する。各人の中にひそむ生命の尊さを知り、それを自覺せしめる秘事を洞察してゐた彼こそ、眞の宗教家である。信仰に根ざした深い人類愛にもえてゐたからこそ、土をいじることによつて、彼等に創造の喜びを味ははせ、新らしい確信を授け得たのである。

×

人格の尊厳性をさとらせ、人生の意義を體得せしめるものは、宗教である。佛の慈悲に浴して、はじめて人間の尊さを知ることができる。絶對者たる神や佛を見出してこそ、自己を確立することができる。

法然上人が一切の人間の榮譽や學問をなげうつて、佛

へ歸投されたのは、眞實に自己を悟られたからである。人間の小賢かしい智慧やたくらみは自己を知る力ではない。

近代の日本人は、あまりにも神を忘れ、佛を見失つた。傲慢にも宗教を排撃した。従つて人間の力を過信しつゝには暴力的な獨裁政治にはしり、いまはしい戦争をひきおこした。眞實の人間性の自覺がなかつたからである。個人の權威も人格の尊厳性も見失はれてゐたのである。

私は今こそ、佛教による眞人間の樹立を實現しなければならぬと思ふ。民主主義の確立も、國民の立ち上りも、すべては尊い佛教の教へにかかつてゐることを銘記すべきである。

一部の日本人は、反動のあまり、日本的なものはずべて罪惡の根源のように考へ、しりぞけようとしてゐる。それが行きすぎであることは、日本人よりも米國や英國の識者がすでに懸念してゐる。恥しい話である。悪いものをしりぞけることは、この際敢然となしとげねばならないが、世界平和に貢献し得るいいものは、あくまでもりたててゆかねばならない。日本の歴史の中にも、日本人の中にも、いいものはある。佛教をとほして現はれた日本のよさ、これこそ先づ第一に見なほさるべきものであらう。

過去の日本の傳統に思ひをはせ、日本人の自覺をうながし、個人の權威を確立させる道は、實に佛教の信仰による覺醒以外にはない。國民の生命に躍動を與へ、希望の光りを與へねばならない。日本佛教徒に課せられた尊い責務である。

本願に就て

擔當 中村 辨康

(問)

法藏菩薩が本願をお立てになつて永い御修行の結

らなかつたならばもう一度お質ね下さいまし。先づ進化論に依りま

す。これは天地間に本質的な

果阿彌陀佛になられ、私達はその

すと、一切の生物は皆な適者生存

「性」が流れて居るからであり、そ

本願に基いて念佛稱名すれば救は

の理に基いて適者でないものは自

れが自然に凡べてを促して居ると

れると云ふことですが、それを承

然淘汰されて行くから皆な適者た

見ることが出来るのであります。

つても私達にはよく分りません。

らんとして進化をつゞけて居り、

しかもそれは植物よりも動物に強

何故に救はれるのか、また救はれ

この競争にまけないように一生懸

く、動物よりも人間に強く、人間

ると何うなるのか。私達は敢へて

命に努力をして居るのであるとの

も單なる經濟生活よりも精神生活

極樂往生などと云ふことを望んで

ことであります。して見ますれば

に強く働きかけられて居りますか

居りませんがそれ以外に何かある

一切の生物が意識するとござると

ら、岩石よりも微生物の方が貴く

のでせうか。御示教下さい。

にかかわらず。悉くが向上を要求

牡丹の花よりも小雀の方が貴く、

(兵庫・有馬・水北生)

して居るわけであります。この事

獅子や虎よりも人間の子供の方が

(答)

本願と云ふことは仲々む

實は大きな綜合意志力となつて共

貴いのであつて、人間の向上こそ

から、この欄で解答へが満足に出

業(共同動作)して居るとも見え

が最高のものでございませう。然

来るか何うか分りません。もし分

またその綜合意志力が逆に一切の

しながら個々のものは天地の全體

會員の頁

親心こそ佛さま

相原アヤ子

春になり母の死に會ひ、かなしき心にて何をする氣もおこらず、自分の希望も消えてしまつたような淋しい人生の波におそはれました。今日はからずも「淨土」を送つて下さいまして、喜びにうたれました。「眞の信仰」に眞理を求めて行脚したいと、私は思つてをります。日頃の親不孝の罪を、誠に悲しく申譯けない。と後悔してをります。まことに佛さまとは、有難いもつたない親心であると、母の死後はじめて思ひあたりました。佛さまの心は親の心であり、父母をうやまう心は佛さまを尊ぶことであると思ひます。かうしてみ佛の道を少しでも怠らず歩んでゆくことが父母への供養であると共に、自分の生きてゆく正しい道

利己的なもののように思つて居りますが、實相としてはさうではありません。天地全體の動きなのであります。言ひ換へれば天地の意志であります。然しこれだけではまだ素朴なものであつて、本當はもつと純化されたものでなくてはなりません。

しかもこの宇宙的な意志の最も純化されたものを見出したのが法藏菩薩であり、それが法藏菩薩の純真な「願望」となつて表現されるに至つたのであります。それは今まで藏の中に藏されてありました天地の大眞理眞實相であり、眞法性でありますから即ち「法藏」の状態であつた譯であります。然るにこの法藏菩薩に依つて「天地は個々のものが存在するのでなく、それらは皆な時間的存在であり、その個々事物の時間的存在も大宇

宙の無始の始より無終の永遠にまで續くところの『無量壽』こそは最も根元的な據りどころとすべきものであり、進化の最高に達した人間をして更にこの天地の大生命の中に融込ましめる『往生』を以て最後の進歩でありそして最大な喜びの境地である」ことを發見されたからこそ「無量壽の佛」と稱せらるることになつたのである

と同時に、その本願こそは凡ての人々をして無量壽の中に融け入らしめて（即ち往生せしめて）最大の喜びを得させるもので、しかもその方法は誰にでも出来るもの、何時でも出来るもの、何處でも出来るものを標準としなければならぬが、それは一法藏が無量壽の中に歸一することに依て阿彌陀佛となり得たのであるから、この阿彌陀の名を稱念すれば誰でも阿彌陀

の中に融け入ることが出来ること考へられて、「唱名」の業は「法爾自然の道理」であると、遂に四十八ヶ條の本願を立てられたのであります。

また救はれるとは、如何なる逆境に處しても常に明るさを見出し喜びを感じて、悲觀に陥ることなく何時でも悩みから脱却し得ることとあります。その境地こそは「往生淨土」であり「往生極樂」であります。さればいつでも無量壽の中に歸入し融入することの出来ること、それが「往生」であり極樂淨土であります。敢へて死後ばかりのことではありません。現實の上にそれが體驗されるのでありますして人間の現實生活を何んなに豊かにし何んなに喜びのものたらしむるか分りません。何うぞ専心に道を求められんことを念願いたします。

であると思ひます。どうか今後、人としてこの世に生くる求道の眞理を御教示下さいませ。いろいろ書きましてすみませんでした。御會の御發展をお祈りします。
(愛媛縣温泉郡浮穴村)

事務室より

紙缺乏のため減頁しながら諸物價高騰のため左記のような値上げを斷行せざるを得なくなりまして。誠に申譯けありませんが、事情御賢察の上、御諒承していただくと共に益々御援助賜らんことを懇願いたします。又會員の倍加運動にも一そうの御協力をお願い申し上げます。

値上げ新定價

- 一 部 參 圓(送料五十錢)
- 一 ヶ年三十六圓(送料六圓)
- 會 費 四十二圓(送料六圓)

發行も紙その他の手違ひから順調ではありませんが、五月號から毎月確實に發行する豫定です。すべての經濟界が行きづまつておます。特に出版界は未曾有の危機で目下の所、全く停頓状態です。しかし、近く紙の割當も決定し配給も開始されそうですから、ここ暫く御辛棒下さい。



私

の

信

仰

佐野ふさ

私は古都奈良の近くで生れ、そこで女學校を卒へ女子高等師範に入りました。奈良はその昔佛法の都として榮えた所だけに、何かしらしつとりとした優雅な感じがあり、それと共に宗教的なふんい氣が漂つてゐて、知らず／＼の間に私もその空氣の中に溶けこんで居りました。女學校を卒へる頃から私の心には言ひ知れぬ不安がつのつて來て、どうする事も出來ませんでした。師範に入ると寄宿舎生活をする様になりましたが、不安の念はますます／＼強くなるばかりでどうする事も出來ず、夜の更けるのも忘れて「我とは何か」「神とは何か」「佛とは何か」等と言ふ事について友達と色々議論する事が度々ありました。けれども何等解決を得る事は出來ません。結局私は聖書を繰返し／＼貪り讀み、幾らか不安の念が薄らいだ様に感じましたが、矢張り不安を一掃することは出來ませんでした。何か解つた様な氣がしても結局「神と我」

との關係になると突き當つてしまひ、物足りなさを感じいろ／＼と先生に質問をして見ても、完全なる答を得る事は出來なかつたのであります。その中に學校も終り四國のある女學校に奉職する事になりました。經濟的に幾らか餘裕が出來たので、宗教關係の雜誌を買つて讀み耽りました。幸ひなことに同僚で宗教に理解のある人がありましたので、種々啓發される所があり、大いに見聞を深めたのであります。

或夜のこと、佛敎の書物を読んでゐましたが「我即ち佛なり」と言ふ所に來た時、「はつ」と靈感に打たれた様な氣がして、歡喜措くあたはずと言つた喜びに滿され、その夜は一晚寝もやらずその氣持ちを書き綴りました。筆をとつてゐる間も嬉し涙が溢れ泣けて／＼仕方がありませんでした。翌日私の尊敬してゐる先生にこの事を詳しく書き送りました。すると先生から喜びの返事が參りましたが、その中に次の様な事

が書いてありました。

「そこまで考へられたのはほんとうに喜ばしい事ですからけれども、「我即ち佛」と言ふ事を机の上で、そして頭の中で考へる事は容易なことです。然し、家庭を持つて、子供は泣き出す御飯は焦げる、人は来る、仕事は山積すると言つた時、その様な考へはたやすくずれて了ひます。もう少し勉強して下さい」

と書いてありました。けれ共私は唯々嬉しくて、そんな事なんか耳に入りませんでした。この事を友達に話すと、友達には「信仰も大切ですが算盤を持つ事を忘れない様になさい」と言はれました。この言葉の意味は最近迄解りませんでした。最近になつてやつとその深意がわかつた様に思はれます。

その後、東京に來た私は、家庭を持ち子供の親となつて、初めて先生の言はれた事が次第に解つて参りました。その間に於てもたえず私は宗教書を読みました。「我即ち佛なり」と言ふ事に就いて少しづつ反省する様になり、何かしら淀みのある感じで居りました。偶々浄土教の信者の方から法然上人法語集をお借りして読みました所、初めの中は何かしら納得が行きませんでした。繰返して読みます内に、上人様の一

句くが體全部にしみ渡る様な氣がしてまいりまして、「我即ち佛だなどとは、随分思ひ上つた考へ方だ」と思ふ様になりました。法語集を読み終りました時には、「私は佛様によつて生かされた躰である」「天地の恵みによつて生かされてゐるのだ。有りがたい」と言ふ氣持が奔流の様に押しよせて來ました。今迄淀んでゐた氣持が消え去り、日々の仕事が愉快で耐らなくなり、ほんとうに生甲斐を感じる様になりました。忙しい中から餘暇を見つけては上人様の法語の重要だと思はれる部分を書き寫しました。上人様の法語の中で「一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知の輩に同うして、智者の振舞をせずして唯一向に念佛すべし」と言ふ所が何とも言へず有難く、私に大きな反省を與へて下さいました。私は毎日、法悦と感謝の中に生活して居ります。私が求めてやまなかつたものは「これだ」と信じて居ります。まだ、本當のことはわかりませんが、ますます勉強し度いと思つてゐます。何卒皆様の御指導を頂く様お願い致します。

ぼくは浮浪児である。

戦争で家は焼かれ、お父さんやお母さんとは別れたまま、今だに會へない。盛り場を、うろつきまはつてゐる間に、悪いことをたくさんおぼえた。かつばらひやばくちを、大人の浮浪者から教はつた悪いことだなあと思つてゐても、

コト

浮浪児

吉澤しげを

食えなくなると、しかたなくやつてしまふのだ。おなかがすけば、善し悪しの見さかいがつかなくなる。

露店街で一杯のシチューで腹をこしらへ、終車の沼津行の汽車に切符なしでのりこみ、また始發の汽車で沼津から東京へ歸つてくる

汽車はこんでゐても、ガード下などどぶるぶるふるへて夜を明かすより、よつほどましだ。時たま親切ごかしに、ぼくたちの生活を聞く人があるが、「可哀さうねえ」と口先きで言ふばかりだ。「收容所にはいれ、白い御飯も温い毛布もあるよ」と言ふ人もあるが、あ

んな窮屈な所はいやだ。ぼくたちにだつて誇りはある。自由をあこがれる氣持はある。救つてやつたんだといふやうな笠にきた態度であつかはれると、かへつて反抗しなくなる。
「こんな所にはいらなくても、食つてゆけるんだ」

何度收容されても出てくる仲間がたくさんある。ぼくたちは愛にうえてゐる。お母さんのような、ほんとにぼくたちのことをおもつてくれる温い愛をもとめてゐる。ぼくたちの自由をそくばくしないひろい深い愛を。

昨夜も汽車の中でお母さんの夢を見た。目がさめて、ほんとにこんな生活をしてゐては、お母さんにすまない、目がしらがあつくなつた。生きてゆくためには、かうするより外に道のないぼくが、とてもとても悲しかつた。
だが、今朝になると、もうおなかがすいて、どうにもならない。ある建築場で木のはしきれを盗んできて、露店商に十圓でたたきうつてしまつた。
こんな生活から足を洗ひたい。ぼくの將來を考へると、まつたくまつくらだ。

「浄土」 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿二年 二月二十日印刷
昭和廿二年 三月 一日發行
(定價 三圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

東京都神田區神保町三ノ一〇
印刷人 春山 治部左衛門

東京都神田區神保町三ノ一〇
印刷所 共立社印刷所
配給元

東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社
發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園淨土宗務所
振替 東京 八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

會費 金 四十二圓
一ヶ年

(送料六圓を含む)
振替拂込みはすべて一圓五十錢増のこと

定價金 三圓 (送料五十錢)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年二月廿日印刷納本 昭和二十二年三月一日發行

浄土 第十三卷 第三號